

WATER REVIEW 2024

FROM STOCKHOLM

2024 ストックホルム国際水週間 速報 Vol.2

2024年8月29日(木)

2024 ストックホルム水大賞 東京大学・沖大幹教授 授賞式・受賞スピーチ

2024 ストックホルム国際水週間のハイライトとなる、ストックホルム水大賞の授賞式・晩餐会が28日夜、ノーベル賞晩餐会の会場として知られるストックホルム市庁舎で開かれ、今年の受賞者となる東京大学の沖大幹教授にスウェーデン・グスタフ国王陛下からクリスタルトロフィーと賞状が贈られた。受賞後には沖教授が約12分間のスピーチを行った。



水問題解決への思いが導いた道

沖教授は28日午前、グスタフ国王陛下が出席される中、ストックホルム国際水週間が開かれている Waterfront Congress Centre のメインステージで、有識者4人が沖教授の業績を振り返りながら、水問題の現状と今後の展望等について語る "Meet the Laureate" に登壇した。

その後のティータイムではグスタフ国王陛下と懇談。懇談には、能化正樹駐スウェーデン日本大使、東京大学の藤井輝夫総長、沖教授とこれまで研究をともにした同僚らも参加した。グスタフ国王陛下とは、スウェーデンで行われている河川へのグリーンインフラの適用などについて意見を交わした。

同日夜には、ストックホルム水大賞の授賞式・晩餐会に出席した。グスタフ国王陛下からのトロフィー・賞状が手渡された後、スピーチに立った沖教授は、これまでの研究の歩みを振り返るとともに関係者への感謝を示し、今後の研究への意欲を語った。

(スピーチ全文は2ページ)



懇談する沖教授、東京大学の藤井総長、能化駐スウェーデン日本国大使、グスタフ国王陛下(左から)

2024 スtockホルム水大賞 東京大学・沖大幹教授 授賞式・受賞スピーチ 全文

※ スピーチは英語にて行われており、本文は本紙にてヒアリング、和訳、編集

今夜の出来ごと、特に国王陛下と王室の皆さまにお会いできたことを大変光栄に思い、感動しています。この特別な瞬間を皆さまと共有できたことは、まさに一生に一度の経験であり、生涯大切にしたいと思います。

私の研究キャリアを通じてずっと心に残っている写真の話から始めます。午前中のセッションでも紹介しましたが2002年のストックホルム国際水週間のレセプションで撮影されたもので、3人の傑出した人物が写っています。2008年のストックホルム水大賞受賞者であるトニー・アラン教授、2018年のブループラネット賞受賞者であり、スウェーデン、いや世界の「水文学の母」であるマリン・ファルケンマーク教授、そして私の論文指導教官であり、2015年の日本国際受賞者である高橋裕教授と一っしょに撮影した写真です。

当時、私はバーチャルウォーターの研究を始めたばかりでした。アラン教授と出会い、彼の画期的なコンセプトについて直接お話できたのは、スリリングな経験でした。そして、ファルケンマーク教授と"greenwater"と"bluewater"について話をすることができたのも、刺激的でした。偶然にも高橋教授が通るから、この忘れられない瞬間を写真に収めることができました。

学校では、学問的知識はしばしば切り離され、真空の中に存在しているように感じられます。しかし実際には、学术界は無数の研究者のアイデア、野心、好奇心によって形作られていて、生きていて、呼吸をする共同体です。この分野の巨人たちと直接関わることができたことは、貴重な体験でした。

ストックホルム国際水週間は、研究成果を発表するだけでなく、人と組織のネットワークを構築することの重要性を常に強調してきました。そのおかげで、私は当時まだ30代だったにもかかわらず、水研究の第一人者たちと出会い、学ぶことができました。

2002年のストックホルム滞在中にノーベル賞博物館を訪れた際、私はある一節に深く心を打たれました。

"The world is still full of sickness and

injustice. Can research find cures for all diseases? Will the Internet and other new technologies make it possible to create a world in which wealth and resources are more evenly distributed?" (世界はまだ病と不正義に満ちている。研究はすべての病気の治療法を見つけることができるのだろうか? インターネットやその他の新しいテクノロジーは、富や資源がより均等に分配される世界を創造することを可能にするだろうか?)

また、最近のノーベル賞の賞状にこんな言葉があることにも気づきました。

"To those who have conferred the greatest benefit on mankind." (人類に最大の恩恵を与えた人々に捧ぐ)

これらの言葉に思いを馳せながら、私はなぜ研究を続けるのか、何を成し遂げたいのか、どのように貢献したいのかを考えました。

私は子供の頃、小学校の卒業文集で「京都大学の物理学博士になってノーベル賞を取る」と大胆にも宣言しました。

私は12才で、当時の日本では素朴な考えでした。ノーベル物理学賞の日本人の受賞者は湯川秀樹博士、朝永振一郎博士の二人がいました。あとは、平和賞を受賞した佐藤栄作首相、文学賞を受賞した川端康成がいました。京都大学に行って物理学を学べばノーベル物理学賞を取れると素朴に思ったのです。

しかし、別の道が描かれていきました。

私は京都大学には入らず、物理学の道にも進みませんでした。その代わりに、ノーベル賞が存在しない水文学者になりました。しかし、この道がストックホルム水大賞への導くとは想像もしていませんでした。

子供の頃は名声を夢見ていましたが、時が経つにつれ、世界の水問題の解決に貢献したいという思いに駆られるようになりました。おそらく、この焦点の変化が今日、ここに私を連れてきたのでしょう。

2002年の写真から20年以上が経ち、多くの課題も残されていますが一方で、私たちの研究が大きな変化をもたらすことができたのかもしれない。私たちは、水、気候変動、持続可能な開発に関する新たな国際的理解の形成を手助けしました。

1990年のIPCC第1次評価報告書のイラストには水循環は完全には描かれていませんでした。1990年の報告書は、河川、地下水、

貯水池や灌漑のような人間の営みが抜けていました。2021年のIPCC第6次評価報告書の時点で、これらの要素がようやく認識されるようになりました。

気候に関する学者たちが水循環の重要性を認識するようになったことを誇りに思っています。そしてglobal hydrology(全球水文学)は、データ、リソース、知恵を共有するコミュニティのおかげで発展してきました。情報通信技術の進歩に支えられたコラボレーションの精神が、この分野を前へと進めさせてきました。私は、この旅の一部分となり、ささやかな貢献ができたことを、非常に幸運だと思っています。

2024年のストックホルム水大賞が発表されたとき、2022年の受賞者であるヴィルフリート・ブルツァールト教授から「人生は短い、だから、あなたの感動的な仕事とともに、精一杯生き続けることだ」とのメッセージをもらいました。

それは本当です。人生は短いですが、「芸術は長い」ともよく言われます。アカデミズムの世界では、私たちの仕事は無数の人々の努力の上に成り立っており、論文や記事として残されています。「人生は短い、論文は長い」と言えるのかもしれない。

知識を前進させ、多くの人に読まれる論文を発表することは、永遠の宝です。たとえ忘れ去られたとしても、100年後に私の論文のいくつかが再び発見され、後世の人々に洞察を与えてくれることを願っています。

両陛下、そして友人、同僚の仲間たち、最後に、この並外れた特別な旅を可能にしてください。皆さんに深く感謝します。

この賞の後援者である国王陛下…ストックホルム水財団とストックホルム国際水研究所の、国際的な水科学の推進における称賛に値する活動に対して…選考委員会およびスウェーデン王立科学アカデミーの皆さま…たゆまぬ励ましとご指導をいただいた東京大学名誉教授の虫明功臣先生…その創意工夫と忍耐はかけがえのないものであった私の同僚と学生たち…global hydrology(全球水文学)とともに発展させてきた世界中の友人たち…

そして最も重要なことは私の家族です。愛と揺るぎないサポートのおかげですべてを可能にしてくれました。

ありがとうございました。



トロフィーを持ち挨拶に立つ沖教授



28日の"Meet the Laureate"で披露された2002年ストックホルム国際水週間に出席した際の写真